

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿<5月18日（金）放送分>

テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第3週に，奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介するシリーズ「郷土の偉人」の第2回目です。

今回は，日本における民俗学の先駆者「柳田国男」を紹介します。

柳田国男は，1875年（明治8年）に兵庫県神東郡田原村の儒者松岡操の6男として生まれました。

上京後，自然主義の文学青年と交流，雑誌「文学界」に斬新な新体詩を発表し，仲間を刺激します。しかし，「なぜ農民は貧なりや」という言葉に示されるように，社会に対する疑問から，農政学を志します。そして，東京帝国大学卒業後，農商務省農務局など官僚の職に就くかたわら，各地を旅行し，『遠野物語』などの書を著します。

1919年（大正8年）貴族院書記官長の職を辞し，朝日新聞社の客員として全国を調査旅行し，その時の記録を基に，『雪国の春』『秋風帖』『海南小記』の三部作を発表しました。

特に『海南小記』は，1920年（大正9年）12月から翌年2月までの約2ヶ月にわたって，九州東海岸から琉球を旅し，その時の見聞をまとめたものです。

その時，本土から琉球を目指して船旅をしますが，名瀬には一晩停泊しただけですぐに琉球に向けて出帆し，奄美大島の調査をしたのは，琉球からの帰りの2月7日から14日までの1週間でした。

2月上旬といえば旧正月の時季に当たります。この間見聞きした奄美大島は，柳田国男の目にどのように映ったのでしょうか。

『海南小記』には，「いれずみの南北」，「三太郎坂」，「今何時ですか」，「阿室の女夫松」の章に，奄美大島で見聞したことが書かれています。例えば，「今何時ですか」の章では出会った子どもや青年たちのことを次のように書いています。

実に奇妙な遊びが流行している。見馴れぬ洋服の人などが通ると，時計を出させて見て，後でみんなで笑う遊びである。金か銀か大きい小さいかを，前に言い当てたものが勝ちになるらしい。自分はもう何遍か諸處で之に出逢っている。此大島でも宅の末の児ぐらいのよちよちと歩く子が，「今何時でちか」などと言って附い

てきた。

かれらしょうに 彼等小 児は村から外へは滅多に出ぬ。さりとして誰が来てこんなくだらぬ事を教えようか。自分は何よりも先ず世の所謂流 行には、まだ不明の原因が潜んでいるということを感じた。

(中略)

其れよりも驚いたのは、住用村の或部落の宿屋で、色々の青年少年が旅人を見がてら、前の川 端の路を往ったり来たりするのに、一人として胴魔 声を立てて、わめいて通らぬ者は無かった。正月だから仕方もないが、大きい分は皆酔っている。そうして彼等ばかりの風流とする事柄を、隠語で怒鳴って笑って行く。

子どもにはそんな才 覚もなく、又 固より酒を飲む筈も無いが、出来るだけ酔った先輩の荒い言葉を真似て、他には何もわめく種 も無いものだから、互いに相手の子の苗 字などを、呼び捨てに呼び交わしている。こんな気の毒な正月が、果たして何時まで辛 抱し得らるるであろうか。

この『海南小記』の基になった旅行の記録は、『南島旅行見聞記』として、酒井卯作氏さかうさくによってまとめられ、刊行されています。両書を併せて読んでみると、よりはっきり柳田国男の南島旅行の様子が分かると思います。

「ちょっと、まずいところを見られてしまった」という感もありますが、先程紹介した青少年の様子もしっかり記録されています。

さて、時代は大正から昭和を経て、平成の世です。貴重な野生動植物や島唄、島の料理などが全国から注目を集め、それを目的に奄美に来られる旅行者も多くいらっしゃいます。そんな方々の目に現在の奄美はどのように映るのでしょうか。

また、そのような方々に奄美のことについて、私たちはどんなことを話してあげられるのでしょうか。すばらしい奄美の自然や文化など、住む人にとってはあたりまえのことを見つめ直す意味からも奄美のことについて書かれた書籍に触れてみてはいかがでしょうか。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。